
不器用な細工師

柏原 福子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用な細工師

【Nコード】

N0961Z

【作者名】

柏原 福子

【あらすじ】

11歳の時から後宮生活に終わりを告げる。公爵家の次女リアーナは皇帝に愛されることなく9年という時を過ごす。疲れ切っていた彼女は幸いにして『細工師』でもあった。『細工師』とは、武器、防具、装飾品に生活用品、あらゆるものに魔法を発動させることができる細工を施すことができ、魔法使いと同じく需要ある職業だった。多くは帝都に個人の店を構えるか、ギルドに入るか、(少し違う事もあるが)どちらにしても食いっぱぐれることはない職業である。

後宮にはいたくないし、食っていける仕事もある。こうなりゃ、脱走するしかないわよね。・・・そんなこんなで細工師となつたわたしだけど、なぜか滅多に勤めることがないはずの神殿に勤めている。ここ、後宮からも、城からも近いんですけど・・・orz
そんなリアラーナの笑い（予定）もシリアス（は、）も戦い（未定）もラブ（！！）もありなそんな話。 優柔不断な作者の処女作です。

終わりました・・・

小説の見直し終わりました・・・

上げていたのは数話だけだったので早く終わりました。

今回分かったこと？があります。

まず、重く考えてはいけないという事です。

今回私は初めての意見に混乱して暴走してました。

ちよつと私にとってきつめな言い方だったものもあり、冷静になれませんでした。

でも、私の目的はあくまで小説を書ききることです。毎回こんな大騒ぎしてはだめですよね。

感想のところでもそう言ってお下さった方もいました。

あと、意見を言うてくださる方は優しめをお願いします。

私、面倒くさい性格で傷つきやすいので、どうかお願いしますm)

——)m

こんな面倒くさい作者ですが、それでも付き合っただけでやるよっていう方、これからは冷静に頑張ってくださいますのでよろしくお願いします。

脱走します

運命だと思った。

後宮に呼ばれ、私はそれに答えた。

これが十一の時。

わたしとあの人の間に阻むものなんて何もなくて、すぐにでもあの人の婚約者になって、幸せな結婚をしてあの人の隣で微笑んでいくはず。

これが十二の時。

でもそれは、ぜんぜん確かな未来じゃなかった。だって現に、わたしは未だに後宮にいる一人のお妃候補。正式な婚約者じゃない。もう何度、「なぜ」ということを考えていたんだろう。自分が悪いような気がして、派手な生活なんて楽しめるわけがなかった。これが十五の時。

もう、考えるのも嫌で、周りの人全員の視線が嫌で、新しく入ってくる人が嫌で、でも意地を張ることも出来ないわたしはまた一段と地味になった。

これが十七の時。

そして今、婚期なんてもうとっくに過ぎていて、つらい現実を少しは受け止められるようになった。もう九年間、同じ窓から同じ景色を見ている。

そこに広がるのは、美しく燃えるように鮮やかな夏の花も枯れ、深い色を帯びた秋の花も枯れ、花は確かに有るけど物足りない冬の景

色

そんな寒そうな景色に反して、わたしのいるこの場所は暖かくて後宮の中でも最上級にあたる豪華な部屋。

豪華ではあるけれど後宮に入る前までずっと見てきた細工師の部屋に似ている、貴族の娘が使うとは思えない部屋になってしまっている。

今、二十となったわたしは、この部屋を出ようと思う

準備です

後宮に入る前から持っていたものの中で売って路銀になりそうな宝石や装飾品を取り出して鞆にしまう。

それに食べていくための道具も。この日のために手に入れた平民が着るような質素なブラウスとズボンをすぐに取り出せるようにと一番最後に鞆に入れて用意が終わる。

そして、髪を切る。いつも顔を隠すように伸ばされた鼻の下まである前髪を眉のところまで、緩やかな曲線を持つ腰まである髪は肩まで。

後宮でのわたしの目印なんて、この長く伸びたこげ茶色の髪と後宮にしては地味な装い。これがなくなれば、多くの人にはわたしが誰かなんて直ぐには分からない。

最後に目深にフードをかぶって完了。

部屋を抜け出し、堂々と裏門に向かう。

見つからない自信があるわけではない。

だが例え、わたしが誰か分かるうと、このリアラーナ・アガト・フランチェスを咎めるなんて、よほどの人で無ければしない。

まず、私のお父様は前皇帝の弟で公爵の位を授かっている。私は公爵家の三姉妹の次女であって後宮の中での地位も確固たるものであるから。

次に、わたしは不気味だから。わたしは部屋に籠もる事が多い。

それは、わたしの趣味（もう、趣味の域から超えているけど）が細工だから。

後宮に入る前、わたしは家を抜け出したときに知りあったおばあさんにときどき会いに行っていた。

そのおばあさんが細工師だって知った時、おばあさんに頼み込んで

弟子にしてもらった。

それから二年後、後宮に入ることになったときは、「せつかく見込みがあったのに教えられなくなっちまったじゃなか！」と怒られてしまった。

その時は嬉しくて、寂しくて泣いてしまった。

そして、数冊のノートを渡され後宮に行っても勉強できるようにしてくれた。

それを読むとき、師匠様の事を思い出して後宮での寂しい思いも和らいだ。

それに、後宮に入って私の細工の技術は見る見る上がっていった。誰かが訪れる事なんてほとんどない後宮の生活は何かを必死にやっていないと辛過ぎたっていう皮肉な理由があるけど。

でも、結局細工をしているとき、師匠様のことを思い出せて本当に嬉しかった。

そんな訳で、何が行われてるか知らないのに、ほかの人は閉じられた扉の隙間から刃物を研いだり、宝石を磨り潰すような音が聞こえるのは不気味だと感じるのだろう。

後宮の妃候補の部屋からなら尚更だ。

魔女的な何かを行っているのでは・・・と。

そんな噂に拍車をかけるように、わたしの顔は半分まで髪で隠れていた。

王が一度としてわたしのもとに来なかったという事と少しずつ入ってくるわたしよりずっと綺麗な人たち。わたしがお飾りであることは直ぐに分かる。

まあ、いくら閉鎖的な後宮だからといって、身分の高いわたしを表立って苛めてくる人もいなかったから、恵まれてはいるんだと思う。だからといって、自分に自信の無いわたしが堂々と出来る訳が無く、年を重ねることに前髪は長くなった。

そうして、わたしの前髪は不気味さに拍車をかけることになった。

けど、この前髪は結構役に立つ。

気持ちがふさいでいる時、外と隔ててくれている様で落ち着ける。まあ、もう切っちゃったけど。さすがにあれでは、見つかってしまうから。

そんな訳で怪しく、なおかつ、貴族としての身分なら後宮のどの姫よりも高いわたしには触れないのが一番と定着した。

わたしの侍女達でさえ、わたしを飾ることを諦め、距離を取っていた。

だからこんな私を止める人なんてほとんどいない。

つと言つても実の所こんな理由なくても、本当に私を止める人なんてほとんどいない。

あ...あの時から後宮から出たいと思っていた。だけど幾ら出たいからと言つて本当に出てしまつたらどうなる？

私に対してあまり態度が良くなかつたとしても、後宮に勤めている何人もの人たちの首が飛ぶのは嫌だ。

そんな人たちの運命を背負えるほど私に何かあるわけじゃない。

公爵家の立場が悪くなるのも嫌だ。

結局私はここから出る事なんてできないんだ。

そう、分かつてしまった。これからどうしよう...。「出して下さい」とか言つてあの人と接触するのは嫌だしな。

そう思っていた時、私は二十歳となり「もう家に帰っていい」と侍女からお許しが出た事を知った。

嬉しいと思つた半面、少し悔しくもあつた。

こんなんじゃない、まるで私が追い出されたみたいじゃない。

とも思つたけどそんなこと小さいことね...

だが、そこにこだわつてみた。

一応、後宮から出るのは明日の予定だつたんだけど、なんかしてやりたい。そんな幼稚な心に負けてしまい、一人で脱走という事をし

てみている。

もちろん、これをするにはお父様にも皇帝陛下の方にも知らせている。

わたしが見返してやりたいのは後宮の奴らであって、別に皇帝陛下でもお父様でもないのだ。

ここの後宮の侍女たちがそれくらいで辞職を願うとか、自害するなんて神経の細い奴らでも、責任感の強い奴らではないのはもう分かっている。

だからこそ、今ここで私を見つけても、どうせ明日出ていくような奴という風にみて、見てない振りをする可能性もある。

もし、これが本当に誰にも知らせてない脱走だった時、どんなことになるかも分かっているんだ。閉鎖された空間には独自の力関係が出来ていき、感覚が麻痺してくるみたい。まあ、めんどくさい話は今、どうでもいいけど。

それに後の事は皇帝陛下がどうかしてくれつつ言ってくれたから。ま、どうにかなるんだろう。皇帝陛下もそれなりに私に気を使ってくれたのか、お父様が何かしたのはかは知らないが。

でも、流石に公爵令嬢が一人で出歩くななんて許してもらえるわけないから、護衛がひっそりと付いているらしい。

とりあえず、私は今ここから出ていきます。

脱出完了です

裏門に着くまでに何人かの人に見られたけれど、やはり声をかける人はいない。

そして裏門にたどり着くと、この空気をすべて吐き出すように息を吐いた。

門番たちが怪訝そうにしていたけれどさして問題なく通過できた。侍女の身分証明書を盗んできた甲斐がある。

城に続いているとは思えないほど暗く細い道にでる。少し進んで服を平民のものに着替える。

もうあの場所には戻らない。やっと抜け出すことができたのだから。

……けど、おかしい。

あの息苦しい後宮から出たら、達成感で興奮してしまうだろうとずっと思っていた……

なのに……

出てきたのは、涙……？

「うっ、……うう。……あは、無理よねえ……」

掠れた嗚咽が次第に大きくなる。

それでも足は止めない。

涙が、ゆがんだ口の横を通り過ぎる。

頬に触れる涙は温かく、嗚咽は、もうどうにも抑え切れなくて獣のような唸りが喉の奥から出てきた。

……ずっと、ずっと。朝起きても、庭を散歩していても、細工をしていたとしても、あの人を一目遠くからでも見れて、嬉し
いはずの時でも。

胸の辺りには四方八方から押さえ込まれるような苦しさがあった。
それに慣れたと思っていた。もう無くなったのでは、と思っていた。

……けど、無くなっていたなら今、ここにあつたのは高揚感なんだろう。

あいかかわらず続く苦しさは、あの人とは結ばれるどころか、一度として会いにきてはくれなかった、その事への失望感、惨めさやそれでも声をかけて貰いたくて待っても結局来てくれる事はなかった日々を思い出すと感じる、引き千切られるような切なさを思い出させる。

それでも、好きなんだ。そのはずなんだと思いつけてしまつて。

最初は、細工に没頭するために部屋に籠もっていたつもりじゃなかった。

もし、あの人が会いに来たとき、直ぐにでも会いたかったから。でもみんな勘違いしてだし、わたしもそのほうが良いんだって思つて言い聞かせて。諦めたんだ、もういいんだって思つたつもりになつて。

わたしはまだまだ現実を受け入れていなかったのだと、今になつて気がついた。

もう、ボロボロなわたしの胸に容赦なく加速する圧迫感と刺さってくる刃。

視界が霞むのは、涙のせいだけではなかった。ずっとずっと続いていた心労に、更に加わる痛み。

体は限界だった。子供のように大声で泣き叫んだ後、ぷつぷつとりアララーナの意識は途切れた。

だが、その少し前にリアラーナはある細工を発動させた。彼女の左の小指についた指輪。小ぶりな黒い水晶がついた上品な指輪だった。後宮にいた姫が着けているには些か地味ではあった。が、その指輪の内側にはきれいな字で刻まれていた。

『私を隠す透明なひと』と……。

その指輪の細工を発動させた途端、リアラーナの姿は見えなくなってしまった。

細工は属性持ちの石、そしてシアスエの古代文字に願いを込め、言葉を記すことで完成する。

失神中です

あの日、わたしが後宮に上がるようにいわれた十一才の夏。

まだ、社交界デビューしていなかったわたしと呼ばれた。

それは皇帝の花嫁候補に、年頃の娘がいるにもかかわらず公爵家の娘が呼ばれないとあっては、アルフォート公爵、リアラーナの父の不興を買うのは目に見えていた。

決して、は愚かではない。権力のために娘のうち誰か一人でも皇帝の花嫁に、と必死に望む必要もない。

だが、周りや花嫁候補が選ばれた家によって、疑問と面倒なうわさが流れることは当然あるだろう。

それは、怠惰で、ある意味変化の無い貴族社会に合った、人の興味を引く為にゴテゴテと飾り付けられた性質の悪い噂になることもあるんだろう。

そうなつては、公爵家に良い事は無い。

必要なのは、花嫁候補として呼ばれたという事実。

これさえあれば、ある程度は何とかなる。だからお父様のところに花嫁候補を、誰か一人寄こすようにと知らせが来た。

公爵家には、息子が居らず、長女が爵位を継ぐことになっていた。今から数百年前に、このネシラル大陸全土にわたる魔物を率いる魔族との大戦があったため、跡取りとなるはずであった男性も戦で次々と死んでいった。

(のちに最も激しい戦いの地となり、誰も足を踏み入れることの出来ない消滅の地となった王国の名をとりシアス工戦と呼ばれた。)
そのため、女性が爵位を継ぐことも珍しくはなくなつた。

また、大戦中や戦後は領地を運営することが難しくなったこともあり、兄であろうが弟であろうが、姉、妹であろうが実力を持つ者が必要とされたことも、女性が爵位を継ぐのを容易にさせた。

リアラーナの記憶の中の姉アルカナは、まさに才色兼備という言葉に相応しかった。

その時十五才であったアルカナは、まだ少女の域を超えない人々が多い中、非常に目立った。なぜなら、すっと通った鼻筋に、大きな瞳に豊かなまつげ、唇はふっくらと花びらのよう、父と同じこげ茶色の豊かな巻き毛に青い瞳を持つ愛らしい容姿の美人だった。

だが、纏うのは扇情的な雰囲気でも、かわらしい雰囲気でもなく、きたる未来、公爵家を継ぐ者として相応しい威厳のある雰囲気であったからである。

それは、幼いころから愛されるための教育ではなく、常に上に立ち人々を導くための教育をされたことがありありと表されていた。

そして、リアラーナの三年後に生まれた当時八才だった妹リリアツテは将来美人になることが約束された天使のような子であった。一人だけ母シフランのように柔らかな黄金色の髪をもち、父の青い瞳を受け継いでいた。

末っ子として父、母、アルカナとリアラーナ、そして城内の使用人全員に愛されて育った。それは、確かに天使のような可愛らしさのおかげもあるのだろうが、何よりその天真爛漫な性格に理由があったのであろう。

それに対して、リアラーナの容姿、性格は二人に比べると派手さは無かった。リアラーナの容姿は、父に似たこげ茶色の細い髪、母と同じ赤い瞳。良く言えば優しそうな、悪く言えば地味な容姿だった。

リアラーナは比較的マイペースに育ったほうであると言える。五つ

も違うアルカナはリアラーナと喧嘩をするわけではなく、父や母はリアッテをかわいがった。リアラーナを疎かにする訳ではなかったが、やはり自然と関心は優秀なアルカナとかわいいリリアッテに向かった。

だから、リアラーナは侍女を連れて好き勝手に庭や城のあちこち時には城外を探検してまわった。そのときに、細工師カミラと出会い、細工の技術を学んだのであった。

この世界では、緋、藍、金、碧、白、黒の属性がある。人は必ず一つの属性は持っている。だが稀に、複数の属性を持ち合わせている人もいる。その中で、金を持っている人が細工師とされる。

金とは、土や大地に由来したものだ。例えば、スカーレットと呼ばれる緋を代表する鉱石も、金が含まれている。だから、細工をするためには、金を持っていないと細工師にはなれない。逆に、金を持っていればどの属性の石を使っても細工することはできる。

また、数百年前のシアス工戦で、多くの細工技術も失われた。それでも日常生活に役に立つものはある程度残っていた。人々は少しでも多く細工の技術を伝えるために、それまで一子相伝だった細工の技術を学園で公開し、資格さえある者には誰でも学ばせる機会を与えた。そのため日用品に使われるような細工品は庶民でも手に入るることができた。もちろん、より高性能、高機能なものは高価になり貴族や一部のみにしか手に入れられなかった。

リアラーナは、金と緋、白、黒を持ち合わせる非常に珍しい子であった。また、手先は器用であり、魔力も高い（これは本人は自覚していないが）。また、リアラーナは師にも恵まれた子であった。カミラは独自の細工技術も開発していた非常に優れた細工師であった。今は、年のせいも余り高度な細工は出来ないが、それでもやはり優秀な細工師であることに変わりなかった。

リアラーナはまさに細工師となる運命にあるようであった。

そんな姉妹であつたら、爵位を継ぐべきアルカナは後宮に上がれない。リアッテは幼すぎるために後宮に一人で入れるわけには行かない。だが公爵家を放って置くこともできるはずも無く、消去法として目立つことのなかったリアラーナが選ばれた。

まだ失神中です

そのときのリアラーナは、後宮という華やかな場所にいくことが子供の好奇心を刺激し行ってみたいという気持ちと、家族とはほとんど会えなくなるという環境に恐怖を抱いていた。

リアラーナのいるこの帝国アガトの後宮はある事件を境に家族とでさえ、外から連絡を取ることは困難な場所であった。外部からの情報は遮断され、皇帝の花嫁となる時、後宮を出るその時まで無知でいるしかなかった。その代わり、ある程度の贅沢は許されていた。そんな環境に不安を抱きながら、肝心な皇帝陛下についてはさして興味は無かったと言えよう。まだ十一才と幼く、色恋よりも城の探検や密か会っていた細工師のカミラの授業のほうがよくほど面白かったあの頃、結婚するかもしれない相手は好奇心の対象から外れていた。

そんなとき、公爵家で夜会が開かれた。

もしこの時、結婚することになるかもしれない皇帝陛下に欠片たりとも興味を持たなければ、今の状況も変わっていたのかもしれない。

そしてわたしはありふれた話通り、姉と踊る皇帝陛下に恋をした。皇帝はそのとき十五才で肩より少し上まである濡れ羽色の髪を揺らし、少し硬い表情で踊っていた。けれど、その容姿は切れ長の目と薄い唇、すっと通った鼻筋、まだ少年のためか中性的な顔立ち、威圧感がありながらも一瞬で見惚れてしまうほど整っていた。

まだ社交界デビューをしていなかったわたしは、二階の手すりの陰に隠れその様子を窺っていた。広間の華やかな光に対してこちら側は陰になっていて、隠れて中の様子を窺うのはうってつけの場所だった。

そう、そこは中からは容易には気付かれない場所。

普通なら向こうから気付くはずはない。

だけど、わたしと皇帝の、

くすんだ赤い目と漆黒の目が合わさった。

あの人の冷たい瞳に魅かれた

気になった。もし笑ったら、あの黒い瞳の中に違う色が見える気がした。

それが、わたしの緋あかだったら良いのに。

顔が自分でもわかるくらいに真っ赤になって、あの人がほしいうって思った。

この時、後宮に行きたいのか分からなかった少女の気持ちはがらりと変わった。もともと色恋に疎かったリアラーナにとって初恋は衝撃であった。こんなタイミングで恋するなんて運命なんだ、そんな思い込みもあった。世間知らずで初恋、運命という言葉に浮かれた少女に後宮へ行くことを決意させるにはそれで充分だった。

しかし両親に構ってもらった記憶の乏しいリアラーナは、素直にその気持ちを言うことができず、結局新しいもの、面白いものが見たいのだと嘘を付いた。

この答えは両親を安心させた。まず、後宮に行きたいという答え。そして、皇帝陛下のことなど眼中にないかのような動機。両親はリ

アラリーナが皇帝から寵愛を受けることにはないと知っていた。だがこの子なら、後宮でも強く生きていけるのではないかと思った。きつと、皇帝陛下の寵愛などほしがらず、逞しく生きていくだろうと思った。当時、侍女たちからリアラリーナは城の探検で新しいもの、面白い場所、そんなことを見つけるのが何よりも好きだと報告を受けていた両親は安心した。

誰もリアラリーナが皇帝陛下に恋をしたなんて気がつかなかった。

目が覚めました

「ん……うっ……えっ、待って」

「えっ！あ、ど」

「……」

寝ぼけてしまった。

ここは、と思っただけを振り返ってみただけ、とりあえず昨日辿った道の脇であることに間違いはなさそう。細工を発動させておいたおかげで誰にも見つかっていないはずだ。

それに、身体の節々は痛むけど、他にはあまり調子が悪そうなどころは見当たら無いし、たぶん数時間眠っていただけなんだろう。さすがに何日も寝ていて誰も気付かないことはないだろうし。

少し寝たからだろうか。相変わらず、後宮での事を思うと胸が痛むけど、これから頑張ろうと前向きに思えた。

とりあえずは師匠様のところに向かおう、と思っただけを噛みしめるように歩いてきたときだった。目の前の空、私の両側に立つ木々の間の空を黒い鳥が数羽横切った。

それを見ると、自然に笑みがこぼれて私の歩みは軽くなった。

あれと同じような黒い鳥だった。

わたしを後宮から出してくれたのは。

元から後宮で住むことには疲れてしまっただけだ。

皇帝陛下を好きで居続けることに疑問も覚えていた。

でも、踏み出せなかった。

「ふはっ」

思い出すと今でも笑えてしまう。

一ヶ月くらい前、私は運よく後宮の庭園の奥の一角に一人、皇帝陛下がいるのを見つけた。

あのときも、やっぱりあの人は綺麗で素敵だった。神々しいとも思った。

あれを見るまでは。

「あの人の声、聞いたこと無かったな」と思っていたときだった。一羽の黒い鳥が飛んできた。

そして、あいつは皇帝にじやれたのだった。

いや、じやれたと言うのは可笑しいかもしれない。かなり速いスピードだった。しかも、真正面から突っ込んでいったのだった。

あの人は、尻もちをついたのだった。

それを見て、やっとわかったのだった。皇帝陛下も人なんだ。

皇帝陛下という肩書、ため息をついてしまうほどの整った顔立ち、漆黒の瞳。そんなことが私を盲目にしたのかもしれない。

もちろん、皇帝だし、普通の人間ではないんだと思う。でも、皇帝陛下も尻もちつくんだ。っていうことが新鮮だった。尻もちつく姿も可愛らしいと思えて、かっこ悪いとは思えなかったけど。

人は一人しかいない訳じゃない。皇帝陛下の他にも人はいる。

皇帝陛下は唯一の神様でも何でもないんだ。人なんだ。嬉しかった。人なら諦められるから。

きつとこれからいくら待ったってあの人を私を愛してくれることはないんだろう。

婚期なんて過ぎてるし。

綺麗でもない。

・・・私はいらないだろう。

なら、もう見ない方がいい。

愛してくれなくても、あの人と話す機会が来るかもしれない。そうになったら、きつと耐えれない。

あの人を今以上好きにならない自信がない。

さっきの尻もちでさえ、わたしのあの人への気持ちを強くさせたのに。

好きにならないわけがない。

・・・幸い、私は皇帝陛下と一度もまともに話したことも無い。傷は浅い。幸いなんだろう。本当に。

もう望みがないなら、諦める。

私は、皇帝陛下のことを思い続けて死ぬことは出来ない。

そんな健気な性格じゃない。

そう。私はそんな健気な性格じゃなかった・・・？

思い出せ・・・私は健気でも臆病じゃない。

小さい頃から自分の容姿が優れていないことなんて分かっていたじゃない。

でも、全然悔しいなんて思っていなかった。

毎日が楽しかった。こんなに弱くなったのはあの人に恋をしたせい？

なら……。なら、いらぬ。こんな恋はいらぬ。辛い毎日しか得ぬない恋なんていらぬ。

細工が世界を輝かせるのが好きだった。

そんな細工を作る師匠様や私を誇りに思っていた。

私は自分を好きだったし、誇りに思っていた。

あの頃の楽しい世界に戻るのもいいのじゃない……

きっと私はまた輝けることができるには違いないわ！

リアラーナは元の世界へと踏み出すことを決めた。

忘れそうになっていた。

私は辛い日々から逃げたいだけじゃなかった。

楽しめたかったんだ。生きることな！

重く考えなくていい。

今生きることを楽しめばいい。

まだ二十歳じゃない。

人生を楽しむ事から始めたっつていいはずだわ。

辛いことばかりじゃ私は何もできないもの。

リアラーナの歩みは、歩み始めとは打って変わった軽快な歩みとなつていった。

リアラーナの気分は、未来への希望と苦い気持ちを抱きながらも高揚していた。

再会です。そして・・・

もうそろそろだ。

そう気付いたのは、人の声というか、後宮では感じれなかった、ただたくさんの人の気配を感じたからだ。

近づくにつれて、歩調が早くなってしまう。

この門を通れば、もう街に出るんだ。

後宮から出る。もう二度と関わらない。そう思うとツキンッと胸が痛んだ。

あの頃の私を思い出せたとしても、やっぱり辛いものはつらいってことかな？

でも、きつとこの胸が高鳴るのは恐怖だけじゃない。そうわかってるんだから、もう大丈夫だ。

門を通り抜ける。

五感を刺激する街の匂い、風景、音、それが懐かしくも新鮮に感じる。

ふと、涙が滲んでいることに気づく。

どうもいけない。

やはり、まだ気持ちが不安定な気がする。苦笑してしまう。

街に出ると師匠様に早く会いたくなってしまった。

なかば駆け足で師匠様の家への道をたどる。

右、左、微かに覚えている目印に沿って向かう。

右、右、左。

そして到着。

目の前にある家は、昔と変わらないこじんまりしていて、修理の跡が目立つ小さなつぎはぎの家。

そつと深呼吸して、息を整え、ドアノブに手をかける。

キィイー

「誰だ！」

「師匠様っ！」

.....

叫んだ後、師匠様は固まってしまった。

「ひどいですよ。愛弟子を忘れたんですか。ああ、こんなに白髪も増えちゃって」

その様子が面白くてからかった瞬間、頭に衝撃が走った。懐かしいこの痛み。そんなに年をとってもまだ殴るのか。

「この馬鹿もん！！これは、部屋の掃除をしていただけだっ！」

そう言っつて、師匠様はニヤツと笑った。

あ、なんか嫌な予感がする。

というか、老けたわけじゃなかったのか。

「ふん。まあ、いい。話を聞こうか」

その後、要約した話を師匠様に話した。

要約した話をしたただけなのに、

「ふむ。それでリアラーナ、お前はこっちに帰って新しく楽しい

生活を送りながら、まだ残る初恋に敗れた傷を癒そうってことか」

師匠様は昔と変わらず、人の考えていることを的確にあてる。辛かったのが忘れられてないことはまだ言っていないのに。

「ふん、ふん。なるほどね。そういうことなら、この街で細工の仕事をするつもりなんだな。なら丁度いい。しばらくしたら働き場所は見つかるだろう。とりあえず、ここで働きな」

「えっ。どういう事ですか。私はこれからギルドに入ろうと思っていたんですが・・・」

駆け出しの細工師は普通、ギルドに入って仕事を受け、名が売れた頃に自分の店を構えるのが一般的だって言っていたのを覚えている。

「ふん。お前、私を誰だと思っているんだい。知る人ぞ知る、名細工師カミラだぞ。その弟子ってことは、まず私の仕事を手伝ってから、独立していけばいいんだよ。ギルドから仕事を始めるだなんてもったい。なんとって、学園には無い細工ができるんだからな」

「あ、有難うございます？あつ。そういえば、私後宮で新しい細工いくつか作ってみたんですよ。見てもらっていいですか」

「ほう。やはりお前は私の弟子だな。才能がある。そこらの細工師共の連中は、新しい細工の一つや二つろくに組めやしない。どれ・・・」

師匠様はあまり裕福な家の出じゃなかったから、最初から有利な条件で働くとかいうことは嫌いだって言ってたし、誰か一人を特別

扱いは嫌いだって言っていたのに。
師匠様なりに気を使ってくれているのかな。師匠様の不器用な優しさにまた涙腺が刺激される。

不安定な自分に困りながらもリアラーナはその夜、再びカミラに細工を見てもらえ、共に語ることができ、久々に余計なことを考えることなく、楽しい夜を過ごすことができた。

「あれ、師匠様どこへ行かれるんですか？」

朝、リアラーナが目を覚ますとカミラは大きな荷物を用意していた。

「ああ、悪いね。急に依頼を受けないといけなくなつたもんでね。数日間空けておくことになるが、まあ、大丈夫だろう。客が来たらお前が用を聞いてくれ。お前ならある程度のことは出来るだろう」

「はあ。一応できますけど、私一人で大丈夫ですかね。お客さんの相手なんてできるでしょうか。少し不安です」

「そこんところなら、大丈夫だね。ここに来る客は質の良い細工を求めているんだよ。それから、お前が本当に弟子っていうことが分かるようにこれを預けておくよ。大事にしな」

そういつて、師匠様は小指からひとつ指輪を取って投げてよこした。それは師匠様しか作れない指輪で、クリムという。色々な特殊効果があるが、主な役目は、師匠様が許可しないと指輪は所有者の指を離れないということにある。

このクリムは、銀色の胴体に薄い赤色の鉱石で作った黄金虫のような小さな虫がつけられている。その羽の下にいくつもの属性もち

の鉱石が小さく砕かれた状態で入れているらしい。そして、その指輪の内側にはびっしりと魔法の文字であるシラスエの古代文字が書かれてある。

とても繊細で綺麗な指輪なので、前からずっとくわしく見てみたかったのだ。

とりあえず、このクリームを着けていれば師匠様が認めたという事が分かる。

この指輪は師匠様に触ることすら許してもらえなかったものなのに・

「はい、分かりました。じゃあ、留守は任せておいてください」

「それから、この家を出るときはクリームに家の戸締りをフルでさせておきな。もうお前の声で反応するようにしておいたけど、クリームの機能全部を使えるようにはしてないから、あんまりクリームに頼るんじゃないよ」

「分かってますよ。師匠様ならそうすると思っていましたし、安心して行っていいですよ」

「解剖しようとするなよ」

「っ！あ、はい・・・」

くっ、また心を読まれた・・・

「最後に、自分の気持ちを大切にするんだよ」

「？はい」

「それじゃ、いつてくるよ」

「はい、いつてらっしゃい」

そのとき私は師匠様から渡されたクリムのことで頭がいっぱい、いくつかの違和感について考えようとせず、師匠様を見送ってしまった。

そのことに、リアラーナが深く後悔することになったのは次の日のことだった。そのときまで、リアラーナはカミラから預かったクリムをとても幸せそうに使っていた。

勤め先決まりました(仮)

師匠様のところに来てから二回目の朝を迎えた。

結局、昨日はお客さんは来なかった。後宮では、人と話すこと自体少なかったせいで、うまくしゃべれる自信は全くなかった。いくら師匠様が気にするなと言っても、やはり緊張してしまった。だが、昨日は尋ねてくる人の一人もおらず、ひとまず安心したが少し残念な気もした。

後宮で友達なんて作れるはずないし、友達を作るのは結婚するまで我慢だと思っていた。でも、結婚なんて結局夢だったんだって気づいちゃってここにいるわけだ。今思えば、良く一人で九年間も片思いし続けたものだ。

まあ、つまるところ、私には友達がいない。後宮にいた頃で友達が凄く欲しくって、でも友達は出来なくて癩癩を起してしまった時もあった。さすがに今はあの時ほど憧れは強くはなかったが、やはり一人や二人は欲しい。

だから、今のうちに少しは自然に人と話せるようになっておきたい。

そんなことを考えている時、「コンコンッ」とちょっと焦ったようなノックがした。

タイミングいい!

そうだ、この人は私の最初のお客さんにもなるかもしれない。そう思うと自然と笑顔がこぼれた。

「いらっしやいませ!」

我ながら、さわやかに言えたのではないだろうか。

何もかもが嬉しくて、頬は緩みっぱなしだ。

顔をあげたとき、そこには綺麗なお兄さんが固まっていた。本当にきれいな人です。青くてさらさらな髪もすごいです。後ろで結っているのかな。って、あれ、なんかデジャブ。なんでみんなの顔を見てか固まるんですか。えっ、私の顔なんかついてます？目ですか、鼻ですか？それとも口ですか？

いい加減動いても良さそうなのに全く動かないお兄さんを見るのが辛くて、現実逃避に走りかけた頃、やっとお兄さんは口を開いてくれました。

「あなた、誰です？」

「……。そんな凄まじい下さいよ。私これでもひきこりの様な生活をしてきたガラスハートなんです。綺麗な人に凄まじくそれはすごく怖いんです。ああ、そんなに眉間にしわよせないでください。後宮にいた頃に他の人ともちゃんと目を合わせて鍛えておけばよかったです。そしたら今こんなに怯えなくていいのに。」

「うう、す、すみません……？」

「いえ、ですからあなたはどなたなんですか」

綺麗なお兄さんは攻撃をやめてくれないようです。

ああ、すっかりしなきゃ私。

「わ、私、この家の細工師、カミラ様の弟子です。あと、これが一応証拠です。えっと、師匠様は昨日から仕事に出ている、仕事の方が何日かかかるので私が代わりに仕事を受けることになっています……」

最後は消えかかってしまったが言わなきゃいけないことは言えただけです。

暫らく黙ってクリムを見ていたお兄さんは顔をあげ、にっこりと笑った。話分かって見えたかな。

「少し詳しく話してもらいましょうか」

ニッコリ

あ、これはだめな気がする。

「・・・それでは、あなたはカミラ様のお弟子さんで、十一年間の間、帝都外れにあるカミラ様の小屋で細工の修業をしていたんですね。それで今は二十歳で、そろそろ仕事を受けてもいい頃だと言われ、今ここに居る訳ですね。でも、小屋に籠りっぱなしだったあなたは人付き合いが苦手だと。・・・それで、あなたの実力はどのくらいなんですか」

「はい。えっと、私も複数の属性を持っているんですけど、それを掛け合わせた細工が得意です。やっぱり、自分が持っている属性の方が応用が利きますし、より高度な細工をしやすいんですね。あつ、もちろん日用品に使われる程度の細工なら一通りは出来ます。というか、とりあえず私が知っている限りの細工は、たまに失敗することはありますが、一通りできると思いますよ。なので、今はとりあえず新しい細工を組み立てたりしています」

後宮での暇な時間を舐めないで頂きたい。あれ、涙出そう。

「・・・そうですか。では、本題に移させてもらいますね。ここに来たのは、かねてよりカミラ様をお願いしていた仕事を、今日から受けてもらえるという事になっていたので迎えに来させて頂いたわけですよ。こちらは、どうしても優秀な細工師が必要だったんです。カミラ様がいなくてどうしましょうかと、思いましたがこれなら大丈夫そうですね」

おかしいな師匠様はめったに依頼を放り出したりするような人じゃないのに。忘れたのだろうか。ああ、やっぱり師匠様も年なのかな。

「あ、依頼の方はもういいんですか」

「……………いや、あなたに頼むんですよ」

「えっ。そんなカミラ様と比べると私なんて優秀な細工師からは程遠いですよ」

「……………すみません。詳しい話はおいおいするとして、とりあえず来てもらっていいですか」

「あ、はい」

大丈夫だろうか。さっきから、こめかみを揉んでるけど。もしかして偏頭痛でもあるのかな。とりあえず、荷物まとめてきますか。
……………

つて、うん？

あれ、クリムに家の施錠頼んでから気づいたけど、どこ行くんだ？

「えと、あのどこに行くんですか」

「あれ、言ってませんでしたか。シルファ神殿です」

「……！」

え、どうしよう。もう、馬車に片足突っ込んでしまった。あわてて振り返るけど、そこには綺麗なお兄さんが立っていて引き返せない。

「どうしたんですか。余り時間に余裕はないので早くしてもらえませんか」

おわった……。どうしよう。

……。師匠様を今ほど憎いと思ったことはない。きつと、昨日の急な仕事も嘘なのだろう。あの師匠様なら、絶対に神殿に入ることを嫌がる。神殿なんてとくに勤めてしまえば、他の国や遠くの地方なんかへ自由に歩けなくなってしまう。

思えば、師匠様は再会した時から挙動不審だった。

いきなり入ったとはいえ、お客さんと間違えるわけでもなく「誰だっ」と叫んだり、片付けるの嫌いなのに部屋の片づけをしていたり、ここで働けばいいとか何時もならあり得ないこと言ったり。

……。ねえ、師匠様。どうしてくれるんですか。

絶対、分かかってやってますよね。

シルファ神殿って言ったなら、後宮からも王宮からもっとも近い神殿じゃないですかぁー！

見つかったら、さすがに連れ戻される……

……。今、分かりました。

クリムをくれたことが、身代りに私を神殿に差し出すことへの、せめてものお詫びなんですネ。

なら、いつかクリムを絶対に解剖して見せます。

そりゃ、もう丁寧に……

自己紹介を覚えました

沈黙が破られた。

「あなた、本当に世間知らずなんですね」
綺麗なお兄さんは苦笑しながらそう言った。

「えっと、そう、ですか」

「へえ、自覚ないんですか。考えてもみて下さい。初対面の人に名前を名乗らない、聞かない。来て下さいと言えばすぐについてくる。先ほど私が話しかけるまでずっと窓の外をキョロキョロと・・・知らない人について行ってはいけないことくらい、子供でも知っていることですよ」
いきなりくどくど話した。どうやら、ずっと言いたかったみたいだ。

「うっ。す、すいません。小屋にずっと籠っていたもので・・・」
少し訂正。窓の外を見てたのはさっきのシーンとした雰囲気気まづかったからです。
怖くてそんなこと言えないけど。

「ええ、あなたが世間知らずなのは分かりましたから。なので、まず名前を名乗って、私の名前を聞きなさい。神殿に着いたら多くの人と会わないといけないんですから、その練習です」

それはいいかもしれない。私も流石にこのままじゃどうしようかと思っていた。丁度いいんで練習させて貰おう。

「わたしは、リアラー……」
あ、やばい。

「リアラー？」

「あ、はい。えっと、リアラ……と言います。家名はありません」
一瞬、綺麗なお兄さんは片眉をあげ、怪訝そうな顔をしたがすぐさつきと同じ不機嫌そうな顔に戻った。ばれてないはず。大丈夫……

「ナ、名前を伺ってもいいですか？」

声が、裏返ってしまいそう。

「私は、オルト・ハイエンスです。シルファ神殿で神官を務めています。これから、いろいろ仕事が待っていますのでよろしくお願ひしますね」

「っはい。よろしくお願ひします」

見つかるのは嫌だけど、仕事は精一杯やろう。私はそうしなきゃいけない。

私が細工師だという事は、まだお父様にも後宮の人、皇帝陛下にも言っていない。後宮の部屋も元に戻しておいたし。師匠様の家に行くことも、お父様には昔の知人のところで少しの間休んでいたいと嘘をついた。

その前に一度帰って来いと言われたが、何度が頼んだら了解してくれた。昔から家の外に無断で外出するなんてしょっちゅうで慣れている事も、許してくれた理由の一つだろう。

公爵家の娘だからと言って、十一歳で後宮入りしずっと外には出て

ないから、危ない人達に顔を覚えられているはずはない。顔つきも結構変わっていると言われたし、金目的の人攫い遭う事はまずないだろう。

・・・ということ、今ここにいます。

私は細工師である事を知られたくない。

どうしてかって言うと、私が複数の属性持ちで魔力があり、貴族の娘だからだ。

シアス工大戦の後、貴族の間での男女差は少なくなった。それと同時に貴族や皇族は、もしシアス工大戦の様な事があった時のために、先頭に立って戦うための軍事訓練が義務付けられた。

それは、大きく分けて二つ。騎士や戦士といった物理攻撃か魔法使いの魔法攻撃になる。

私も実は細工を知る前までは、魔法を習っていた。というか、習わされていた。

問題だったのは魔法を習うと時間がとられるという事だ。

もちろん、細工を知るまではそんな事問題ではなかった。だけど、細工を教わりたと思った時、魔法と両立させるのは難しかった。

剣術と違って魔法は城の中ではなくて、森や川、砂漠、とりあえず自然が城より多く感じれる場所で練習するのが当たり前だった。いろいろ理由はあるらしいけど、あまり覚えていない。

とりあえず、魔法を習っていると、細工をしたくても時間が取れないのだ。

細工も貴重な技術であるのは変わりないのだけど、戦闘には向かない。

細工のほとんどが日常生活で使われるものである事。それと、身体能力を上げたり、魔法の補助をする細工はほとんどなく、効果も薄い。また、そのどれも中級の細工師ぐらいなら誰だって作れる。

貴族が細工を作るなんて、考えられないのだ。魔力があるなら魔法使い。それが当たり前だ。

戦いが始まった場合、皇族や貴族などの特権階級の人達は、余程の腕でない限り装備品を作るなんて仕事をしない。

私たちの役目は先頭に立って勝利に導く事。アガトは、シアスエの地に面している。だから、シアスエ大戦が終わり、長い時が流れた今も私たちは、戦う訓練を怠るわけにはいかない。

私たちの国アガトは別名軍事国家アガトとも呼ばれている。軍だけでなく、皇族も貴族も戦う事が出来る。また他の国に比べ、軍全体の戦闘能力も高く、軍人の数も多いと言われている。他国への侵略に利用しないことを前提に、軍の保持を許されている。

私たちは、私は、戦えなければならぬ。

だけど私は、魔力を隠す細工を使い、ある日突然魔力を失った振りをして、魔法から剣術の稽古へと変えさせてもらった。私は魔力さえあれば、複数の属性を持っているのだから、大きな戦力になることは間違いない。

だけど、どうしても細工の魅力に抗えなかった。私は責任を放棄した事にはならないが、剣術よりも魔法を使う事が最善であったのにも拘らず、そうしなかった。私が細工師であるためにも、私が貴族の娘であるためにも、私は戦闘に使える細工を生み出す。

細工を学べる事になった時、その事を自分に誓った。

私が細工師であることに価値がなければならぬ。でも、私には実績がないのだから、細工師である事なんてまだ許されない。

でも、諦めたくない。だから、ここで細工を作れる事、魔力がある事をお客様たちに知られてはいけない。

・・・だから、シルファ神殿にいるのはまあ、良いとしよう。でも、細工を作れる事はばれたらいけない。でも、仕事はしなきゃいけない。そうになったら、もう身分を偽るぐらいしか思いつかなかった。

そうこうしている内も、馬車は進み、着実にシルファ神殿に近づいて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0961z/>

不器用な細工師

2011年12月21日00時36分発行